

ASE 活動を取り入れた大学サッカーチームの組織状態に関する研究  
 —強いチームの成立条件に着目して—  
 吉田健太郎（生涯スポーツ学科 野外スポーツコース）  
 指導教員 林 綾子

キーワード：ASE 活動 大学サッカーチーム 組織状態

**1.序論**

現代社会において、人と人をつなぐ対人関係は重要である。それらを円滑にさせるものとして、野外教育において発展してきたASEがある。ASEとは、一人では解決できない肉体的精神的課題に対し、メンバー個々の能力を出し合い、協力しグループで課題を解決していくアクティビティであり(布目, 1989)、グループ毎に課題を進めて行く事で、チームワーク、チームの雰囲気へ好影響を与えるとされている。筆者はこの ASE 活動を活用し、自身が所属するチームの組織状態向上を図った。組織状態については、淵野(2013)の強いチームの成立条件である、「明確な目標」、「密な対話」、「達成貢献意欲」に「面白まじめ」の要素を加え、チームの組織状態と捉えた。

そこで本研究では ASE 活動を取り入れた大学サッカーチームの組織状態を、強いチームの成立条件に着目して明らかにすることを目的とした。

**2.研究方法**

**【対象者】**

2014年8月に行われたASE活動に参加したB大学所属のサッカー部I1所属の1~4回生34名を対象とした。その後、多少のチーム変更があり、最終的に26名を分析対象とした。

**【調査方法】**

ASE活動での大学生サッカーチームの組織状態を測定するために、淵野(2013)の強いチームの成立条件を筆者が修正し、筆者が4因子17項目のアンケートを作成し、事前、事後、1ヶ月後の3回の調査を実施した。

**【活動】**

プログラムとして、ウォール、決死のダイブ、Amazon、魔法の絨毯、日本列島、ヘリウムフープ、暗夜行路を実施した。

**3.結果と考察**

事前、事後、1ヶ月後で1要因対応のある分散分析を行った結果、以下の通りになった。

表1. 強いチームの成立条件の平均値・標準偏差・F値

M(SD)	事前	事後	1ヶ月後	F 値
目標	14.92(1.99)	14.23(2.53)	13.54(2.43)	3.35 <i>n. s.</i>
密な対話	21.32(3.86)	24.24(3.63)	22.04(3.65)	8.85*
達成貢献意欲	26.38(4.57)	30.26(4.68)	26.19(4.70)	14.41**
面白まじめ	13.08(2.51)	14.36(2.37)	13.92(2.08)	3.39*

\*\*\**p*<.001 \*\**p*<.01 \**p*<.05

1)明確な目標得点の変容

「明確な目標」得点は、どの調査時期においても有意な差は見られなかった。レギュラー・サブにおいても、調査時期において有意な差は見られなかった。

2)密な対話得点の変容

「密な対話」得点においては、活動直後で有意な向上が見られたが、1ヶ月後では有意な差は見られなかった。レギュラー・サブにおいて活動直後で有意な向上が見られたが、1ヶ月後では有意な差は見られなかった。活動を通して、学年の壁を越えて、色々な人とコミュニケーションを取ることができたことが得点の向上に影響したと考え

られる。維持されなかった要因として、リーグ戦が行われている期間よりもチームで過ごす時間が確実に減少し、チームメイトとのコミュニケーションを取る場面が少なくなったことが要因と考えられる。

3)達成貢献意欲得点の変容

「達成貢献意欲」得点においては、活動直後で有意な向上が見られたが、1ヶ月後では有意な差は見られなかった。レギュラー・サブにおいて、活動直後で有意な向上が見られたが、1ヶ月後では有意な差は見られなかった。向上した要因としては、活動中どのグループも非常に集中力が高く、自分はグループの一員であるという意識が強く持たれていて、必ず課題をクリアするという個々の負けず嫌いな気持ちがつながっていたことが考えられる。1ヶ月後に維持されなかった要因として、サッカー場面に戻った時に、競い合う場面が減少し、一つのことにに対して達成し、その喜びを味わう場面が極端に減少したことが考えられる。

4)面白まじめ得点の変容

「面白まじめ」得点においては、体験直後で有意な向上が見られたが、1ヶ月後では有意な差は見られなかった。レギュラー・サブにおいて、体験直後で有意な向上が見られたが、1ヶ月後では有意な差は見られなかった。向上した要因として、I1チームは、物事に取り組む時は常にポジティブで明るく取り組めることが特徴である。その特徴が、活動中において大いに活かされていたことが考えられる。維持されなかった要因として、チームの成績が低迷していくにつれチーム内の明るい雰囲気が薄れたことが考えられる。

5)因子間相関

全因子間の関連を明らかにするために、事後においてピアソンの積率相関分析を行った結果全ての因子において、有意な正の相関が見られた。それぞれの因子が強く関係していることが明らかになった。4つの因子は強く関係しており、互いが独立するのではなく、チーム内でのコミュニケーションや雰囲気が促進されることで、目標に対する意識や意欲が向上されるのではないかと考えられる。

**4.まとめ**

本研究の結果から、ASE活動を取り入れた大学生サッカーチームの組織状態は向上したが、維持されなかった。その要因としてASE活動を実施する時期を検討する必要があると思われる。リーグが終了し、チームメイトも実習などを終え、後期リーグが始まる前に全員が揃い、後期リーグに向けて一致団結し全国大会出場という目標をもう一度再確認させてからASE活動を実施できていたら、向上した組織状態をより活かすことができているのではないかと考えられる。

**引用文献**

淵野康一(2013) 強い組織と弱い組織を分けるもの:その違いと組織蘇生の条件. 株式会社東レ研究所.  
 布目靖則(1989) キャンプテキスト、日本野外教育研究編、安林書院：東京、127-133